
東方双俄録 ～ 2 人のにわか東方ファンが幻想入り

kaiser

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方双俄録 ～ 2人のにわか東方ファンが幻想入り

【Nコード】

N9805T

【作者名】

kaiser

【あらすじ】

にわか東方ファンの中学生2人組がひょんなことから幻想入りしてしまう。

彼等は不思議な世界、「幻想郷」で様々な経験をしつつ冒険をすることになる。

「さあ、行こう！誰も知らない幻想の地へ！！」

（この小説は基本駄文な上厨二病全開です。
真面目過ぎる方やテンションの高い文章が嫌いな方は閲覧に注意し
て下さい。）

序章 F a n t a s y w o r l d i n t o t w o n e w c o m e r s

初めての方は初めまして。

知っている方は今日は。

k a i s e rと申します。

g d g dで中二病全開の文章ですが、どうか暖かい目で見てやって
くだされ。

>タグ<

「嘘だと言ってよ兄貴いい!!」

「粉 バナナ!!」

「うそおおおおおおおん!!?」

序章〈Fantasy world into two newcomers

『幻想の地への扉は案外身近な所にある。その扉に気付くかはその者次第である。』

〈ある賢者の日記より〉

〈out side〉

ここは〇〇県市立羽是得中学校。

季節は6月に入り、梅雨が到来していた。

そんな昼休みの教室。

何時ものように会話が時間が過ぎていく中、ある生徒がこんな事を言い出した。

「なあ、雨降っててつまらねえし幻想郷の入り口でも探さ内科？」

そう唐突に言い出したのは2年B組の

江藤 健人。

身長は160cm程。

青い眼鏡と、校則違反スレスレまで伸びた黒い髪が特徴。

「ご乱心めされましたかwwまあ暇だし、特にこれといった予定もないから付き合っただけよ。」

そう相槌を打ったのは同じく2年B組の

ないとう えいしん
内藤 栄信。

身長は165cm程でパーマのかかった黒髪と浅黒い肌が特徴。

彼等は「にわか東方2人組」と呼ばれる仲だった。

1年の冬、栄信が何気なく漏らした東方の用語に健人が反応して意気投合し、現状に至る。

現在彼等には週末＋開校記念日ということで宿題がある。

しかし彼等は

「週末に出された宿題なんて、最終日の午後が本番だろう」という方針の種族である。

「あ、やべっ！チャイム鳴る！」

「早く座った方がいいぜ江藤君w」

「サーセンww」

（数時間後）

学級委員長「規律！礼！さようなら！」

同級生達「さようなら！」

「さて…学校も終わったことだし
やらないか。」

「バーローww」

「それはさておき」

「（スルーかよ）」

「お互い幻想入りを想定して準備しようか。『備えあれば憂い無し』
とも云うし。」

「おお…珍しく健人が正しいことを言ってる。」

「なんで俺が普段まともじゃないように言っただよ？w」

「そんな風に聴こえてたらスマソ。それよりも目星はついてるのか
？」

「勿論。この前X山の 市側の麓に地霊殿並の大きさの洞窟を見
つけたからな。」

「マジかww」

「マジだww」

「じゃあ午後4時にX山の近くの駅に集合だな。全速前進!!」

「うはwwみwnwぎwつwてwきwtww」

「数十分後」

「おう、栄信。」

「おう健人。じゃあお互いの荷物の確認だな。」

「ステータス：健人」

- ・金槌
- ・カッターナイフ
- ・財布（内容金額一万五千元）
- ・ハイチュウ（グレープ）×3本
- ・DSi（DSカード無し）

「…おい。」

「なんだよ栄信。」

「カッターナイフは分かるとして、何故に金槌？ww」

「いや俺等普通の人間だからその辺にうろついてる妖怪に襲われた

ら即死フラグ立つぞ。」

「分かるん…だけどな。」

「分かるんだけど？」

「なんか…物騒だな。」

「そこは触れたら負けだ。塚、栄信はどうなんだ？」

「ステータス：栄信」

・木刀

・エアガン

・BB弾×100粒

・カロリーメイト（チョコ味）×5箱

・PSP（モンハン3rd入り）

「…栄信君、どういうことかな？」

「何が？」

「どうやってその木刀をその鞆に入れた！てか人のこと言えなくね！？」

「気にすんな！！w」

「30分後」

「隊長！どうやら我々は遭難したようです！！」

「そうなんです…なんてな。笑い話だったら良かったんだが。」

2人は遭難していた。

更に雨が強くなってきた上視界不良で、帰るに帰れない状況だった。

「なんてこった…GPSさえ持って来ていれば…」

「ん…？何だ…？」

大きな洞穴が現れた！！▼

「なんとチートww」

「今何か言ったか？」

「いいや全く全然。」

「それよりもこの門…どうすれば…」

…あれ、こんな所に何かの鍵が？そして丁度鍵穴にピッタリ？」

洞穴の門は開いた！！▼

「入ろうか？」

「ああ。（作者のチート？w）」

く洞窟に入った直後く

「眩しっ！…え？暗い洞窟の筈…。」

「見渡す限りの自然と…神社？どうなってるんだ？」

「それは俺が聴きt（ry）…」

その時格子が開いた。そしてそこに居たのは…

「誰？貴方達。」

永遠の楽園の巫子『博麗霊夢』その人だったので、ある。

く続くく

序章 F a n t a s y w o r l d i n t o t w o n e w c o m e r s

という訳で幻想入りしてしまった2人組!!

彼等は無事、元の世界へ帰ることが出来るのだろうか!?

出来れば感想等でアドバイスを欲しい所だが、作者に1つでもコメントがくるのだろうか!?

次回、「まさかの幻想入り達成 : 1日目からそりやないぜ龍神様。」に続く!!

(予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。ご了承ください。)

第一話〜まさかの幻想入り達成 … 1日目からそりゃないぜ龍神様〜（前書き）

どーもkaiserです。

今回は深夜の幻想郷の話のようです。

>タグ<

「逃走中…だと」

「エマーゲンシー！」

「ウホッ、チートwwwwww」

第一話　まさかの幻想入り達成　…　1日目からそりゃないぜ龍神様

～ 健人 side ～

俺達二人は今、命を狙われている。

現在幻想郷では、おそらく午前4時になるだろう。

後ろから漆黒のワンピースを着た少女が迫って来ている。

…そう、有名な宵闇妖怪

ルーミアだ。

～ 回想　數刻前 ～

「貴方達ここらじゃ見かけない顔ね。外来人かしら？」

「ええ、勿論です。（闇サトシ風）」

「ところでお前の名前は博麗靈夢で合ってるよな？」

「ええ、そうだけど…何故私の名前を？」

「それは…」

～ 少年説明中 ～

「ふーん、そう言うことだったの。」

「あれ？普通そこもつと驚くところだと思っただが。」

「たしかに確蟹。」

「ああ、そこね。どうやら此処幻想郷の外来人の多くはその「東方」
ってゲームで私達を知ってる人が多いみたい。だから別に驚くこと
じゃないのよ。」

「俺達の他にも外来人ってたくさん居るんだ！？」

「たくさんって程でもないけど…大体幻想郷に居る外来人は貴方達
含めて12人かしら。最近外来人が多く入って来てネタに困らない
って文が言っていたわね…。」

「mjk。」

「マジよ。…ところで貴方達、これからどうするの？もうそろそろ
夜になるわよ？」

「アッー！」

そう、俺達は会話に夢中で忘れていたんだ。

『妖怪達が人間を食べるのは当たり前』ということがこの世界では
常識化してるのを！！

「博麗神社は…。」

「駄目。」

「一晩だけでも。」

「駄目。」

「そこをなんとか。」

「駄目。」

「人助けだと思って！」

「駄目と言ったら駄目！」

その数時間後…

「はぁ…疲れた。」

「どうした健人。まだまだ人里への道は長いぞ。」

「そんなこと言っても…6時間ぶつ通しで歩いてるし…。」

「ん…あれは？」

「無視ですかww」

「あれルーミアじゃね？」

「マジか!？」

「ちょww大声を出すn(ry」

「わー人間だー。お腹空いてたから丁度いい。」

「「やべっ、バレた!!」」

〽回想終了〽

…てな訳で現在逃走中。

「までーご馳走ー。」

「HELPMEEEEEEEEE!!えーr(ry」

「誰も来ないのだー。早く絶望した方が良いのだー。」

見かけによらずえげつないこと言うよこの娘…

…あれそつえば今何時だっけ？

ふと夜空を見上げた。

「…ルーミア、これで終わりだ!見ろ!朝日が昇って来た!」

「え?...あつ、ああああ!!」

「...そうか!アレを使う気だな!」

「君のような闇の妖怪は霊光に弱い!チェックメイトだああ!!」

博麗神社から去る時、霊夢から「魔除けに」と貰った鏡を取り出す。そして太陽光を上手く反射させてルーミアに当てる。

「喰らえ!滅びの反射ストリーム!!!」

「きゃああああ!!」

そう叫ぶと、ルーミアは森の茂から逃げて行った。

「太陽光を霊力入りの鏡で反射させて霊光として直接当てるとは...
なかなかの策じゃないか。」

「バーローwwそんなことより人里に着いたようだぞ。」

目の前に、昔の日本の街のような場所が見えて来た。

「さて、金はたくさんあるから...」

「（俺の金だよねえ！？）」

「Let's 豪遊！！ww」

「続く」

第一話〜まさかの幻想入り達成 … 1日目からそりゃないぜ龍神様〜（後書き）

色々な騒ぎが起きつつも、人里に着いた二人。しかし、まだまだ一波乱ありそうな予感。彼等が人里で起こす騒動とは！？

次回、「第二話〜超動！2人に眠っていた能力！〜」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第二話く超動！2人に眠っていた能力！ーく（前書き）

ハイ今日はkaiserです。

定期テストめ…

まさか俺をここまで苦しめるとわ…。

>タグ<

「何故にその様な物が売買されているのか」

「マジっすか。」

「人の幻想ってフシギダネ。」

第二話　超動！2人に眠っていた能力！！

（out side）

ルーミアとの鬼ごっここの数刻後、2人は人里で買い物をしていた。

「何買おうか。」

「そっだな…。先ず武器や防具は必須として、幻想郷の正確な地図とか…。」

「よし、じゃあスペルカードでも買うか！」

「ちょ、えええ！？普通売ってるかそんなもん！？」

「売ってるかもよ？」

「スペルカードってそもそも攻撃の宣言をする為だけのカード自体には何の力も無いから買っても意味n（ry…。」

「おっ、アレじゃね！？」

「人の話を聴けええい！！」

何だかんだで屋台へ向かう2人。

「いらつしゃい。」

「能力を引き出す為のスペルカードって有りますかね？」

「（ある訳ないだろ…。）」

「ああ、それなら15枚1組のが……あつたあつた、丁度2つ有るね。220円だよ。」

「（あるんかゐー！）」

「おお安い！てな訳で健人、早速マネーを！」

「俺かよ！しょうがないな…。」

「毎度ありー。」

「数分後 人里近くの森」

「じゃあ早速テストしようか！」

「いきなりかよっ！？そう言うのって後々何かあつた時の為にとっておくもんじゃないのか？」

「一応テスト用に発動してみないことには俺達の眠っている能力がどんなものか分からないんじゃないか？」

「栄信…何か今日輝いてるな。」

「まあな。じゃあ先にやるか。」

「はああああ…自分でこんな弾幕を放ちたいとイメージして…、
覚醒「バーサーカーソウル」ッッ!!」

シーン…

「失敗…か…。栄信、落ち込むなって。いつか絶対成…!!!!」

ドオッ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

「ッ!? 栄信の体が! 黒く…闇に染まってゆくだとおおお!?!」

「うおおおおおおお、うおおおおおおおおお!!!!」

バビッ シュウ!!

「な…何だアレ!? あ、悪魔…!?!」

栄信の背後から、黒い竜巻と共に紫色のおぞましい影が現れる。
そして…

影から無数の黒弾幕が一斉に放たれた。

ドガアアン！！ガガガアン！ドドガアン！！！！ガンドドガアン！！

「うわあああ！！あたり一面火の海だあ！？」

圧倒的な大爆発が起こり、周りの風景が地獄絵図と化す。
そして、更に爆発は続く。

ガガガガガアアアン！！ドガアアアン！ガガドドガガドガアン
！！！！

「このままじゃ人里が…何とかしなきゃ…。」

炎を消そうと必死に考える、そして健人は1つの結論に辿り着いた。

「…一か八かだ！水槍「デイベインハイドロ」！！」

自分も暴走するか不安な中、自分の中で思い描く属性の弾幕を発動させる。

ゴオオオオオ シュパアアン！！

空気中の水分を集め、槍の形にする。
そして…それを慎重に手に持つ。

「頼んだ俺の能力^{ちから}!! そおい!」

ヴオオオオオオ…

水で出来た槍は空中で孤を描き…

バシャアッ

はじけて水の粒が四方八方に霧散し…
やがて、鎮火した。

丁度その時、栄信が正気に戻った。

「おわっ、何だコレ!?!」

どうやら途中の記憶が無いようだ。
じき人が集まって来るだろう。

そう考えた健人は逃走することにした。

「さあ行こうぜ! 次の冒険へ!!」

「ああ! それにしても体中が痛い…健人、何かあったのか?」

「答える必要はない。」

「ちょwww」

「サーセンwww」

）続く）

第二話〜超動！2人に眠っていた能力！〜（後書き）

かくして最初のスペルを手にした2人！

だが、そんな2人の前に強敵が現れる！！

果たして彼らは勝利をおさめることが出来るのだろうか！？

そして作者への感想が未だ1件しか無いのだが、気力だけで続けていられるのだろうか！？

次回、「第三話〜VSチルノ 霧の湖での決戦！！…マジっすか〜」
に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第三話くVSチルノ 霧の湖での決戦!!…マジっすか (前書き)

先に言っておきます。

チルノファンの皆様すみません。

>タグ<

「近道…だよね?」

「祝! 幻想入りしてから初の戦闘!! ww」

「罵倒の内容がヒドスww」

第三話くVSチルノ 霧の湖での決戦!!…マジっすか

くoutsideく

「ああく暇だ…。という訳で健人、何か良い暇つぶしは内科?^{ないか}」

「唐突だな!…スペカも手に入れたことだし、力試しに紅魔館行くってどうだ?」

「よし、決定!」

「ええええええ!?採用された!?!」

「さあ、出発!全速前進DA!」

「早速かよ!…って、ちょww栄信待(r)y」

く数刻後く

「ヴォイ…本当に霧の湖を突っ切るルートでいいのか?」

「だって最短ルートだし。俺を信じる健人。」

「しょうがないな…あ、霧がかかってきた。」

「さあ着いた。自称最強の馬鹿な氷精が居なきやいいいな。」

ガサッ

その時、茂みの中から氷の羽をはやした少女が現れた。
チルノである。

「馬鹿って言うなあ！」

「あ、予想通り出て来た。」

「まあ…馬鹿だし。」

「しょうがないよな、馬鹿だし。」

「出て来た途端に馬鹿馬鹿言われたあ！！」

「霧の湖に着いたってことは紅魔館まであと一息ってことだな、栄
信。」

「ああ、こんな所に長居は無用だ。行こう。」

「ちよつ、人を呼んでおいて無視するの！？」

「何だよ、何か用か？」

「当たり前よ！あたいの縄張りに侵入して来た奴をみすみす通すと思
う？」

「はあ…めんどい。コイツが美鈴だったら良いのに。」

「分かる分かる。」

「兎に角勝負よ!!」

暫しの間沈黙が流れる。そして、

「「「Set Spell Card!!」」」

闘いが、始まった。

あたいのターン！氷符「アイシクルフォール」!!」

氷の棘が次々と形成され、左右から迫って来る。

「いきなりスペカ発動かよ！まだ10秒すら経ってないぞ!？」

「落ち着け！ここは外の世界の常識が通用しない世界だ!!」

「だからいきなりスペカを放つてきても可笑しくないってことか…。
それならこつちも！風槍「デイバインテンペスト」!!」

空気を収束し、真空の槍を造る。

「これでも喰らええい!!」

そしてそれをアイシクルフォールが交差する位置に向けて投げた。

ガガガガガガガギイイン!!

アイシクルフォールの氷の棘を削り、吹き飛ばしていく。

「あばばばばばば冷風地獄だ…。」

「早くも新スペル編み出してるよこの人。」

「サーセンwwしかしチートはまだまだ続くぜ!雷槍「デイベインボルテクス」!!炎槍「デイベインバーン」!!」

「ば…馬鹿な!!ダブルスペカ発動だとおおお!!?...チートの極み、アーツww」

空気中の静電気を収束し雷の槍を、
降り注ぐ日光の温度を収束し灼熱の槍を造り…

「これで終わりだああ!!そおい!!」

チルノに向けて投げた。

「うつ、防ぎきれない…きゃあああー!!」

ドガアアアアアアアアアアアン!!!

「爆発したー!!?」

「はいポピー!!」

「凄いな…どうやって1日足らずであんな枚数のスペカ編み出したんだ?」

「イヤ…100%偶然なんだが。」

「S級犯罪並のチートだなww」

「フツ、有難う。」

「褒めてねえ!!w」

「くつ、あたいの負けね…なかなかやるじゃない!!でも次に会う時はあたいが必ず勝ってみせる!覚えてなさい!!」

そう言い残すとチルノは去って行った。

「…今のは完全に負け惜s（ry」

「同感w」

「じゃあ新スペルも入手したことだし…行こうか!」

「「紅魔館へ!」」

「…所で俺今回何もしてなくね?」

「ドンマソ栄信。」

「
夏
W
W
」

）
続
く
）

第三話〜VSチルノ 霧の湖での決戦!!…マジっすか〜（後書き）

かくしてチルノを撃破し、紅魔館へ向かう2人。
そんな2人の快進撃を妨げる者とは!?

次回、「第四話〜VS十六夜咲夜 …あな恐ろしや、時の支配者〜」
に続く!!

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第四話くVS十六夜咲夜 … あな恐ろしや、時の支配者く（前書き）

今日は、kaiserです。

… え？お呼びでないって？

… またまたくご冗談を。

… え？冗談じゃないですって？

… それマジ？

>タグ<

「門番サボリww」

「気絶…だと…！？」

「栄信、無意識下の覚醒を行うー」ww」

第四話　VS十六夜咲夜　…あな恐ろしや、時の支配者

　　out side

「何だかんだで着いたな。」

「何だかんだで着いたな。」

「ちょｗｗセリフパクんなｗｗ」

「サーセンｗｗ」

2人の目の前にあるのは巨大な紅い館。
その名も「紅魔館」。
彼等は今、ここに到着したばかりだ。

「にしてもアレだな。おとぎ話に出て来る城そのまんまだな。」

「謝れ！全ての東方ファンの皆様に謝れ！」

「このとおり！」

「よし、許す！」

「委員会！！ｗｗ
　　いしんかい

「さて、本題に戻るか。」

「…絶対に寝てるよなあ門番。」

本来入り口を守るべき人があろうことが居眠りしているのである。
まあ、何時ものことなのだろうが。

「Z Z Z…」

「なんというか…寝てるが…。」

「イヤ、実は寝ているのを装っているだけかもしれない。確認してくる。」

そう言うとき健人が

門番、紅ほん 美鈴めいりんに向かって静かに駆け寄って行く。

「あの一。」

門番は ぐうぐう 眠っている！▼

「もしもし。」

門番は ぐうぐう（ry！▼

「侵入していいんですかー。」

門番は（ry！▼

門番が眠っていることを確認した健人が栄信にグーサインを出す。
それを機に2人は…

「OK、侵入成功だ。」

紅魔館への侵入に成功した。

「さて…侵入したがどうするよ。妖精メイドが来るのも時間の問題だぞ。」

「ああ、それだけは避けないとな。」

そんな会話をしている2人の前に…

「ここから先は通させません。」

銀髪のメイド、十六夜 咲夜が現れた。

「何しに来たんだ？メイド長さん。」

「侵入者は排除する。ただそれだけのことです。」

「仕事優先…か。どこかの門番さんとは凄い違いだ。」

「美鈴がまたサボっていましたか。貴重な情報有り難う御座います。」

「こちらこそどういたしまして。」

冷たい視線が交差する中、沈黙が訪れる。

「…まあつまりアレか。」

「「お互い衝突は避けられないということだな（ですね）。」「」

「そうと決まれば、」

「話は早い…！」

「「Set Spell Card…！」」「」

闘いの火蓋が、切って落とされた。

「攻めさせて貰います…！奇術「エターナルミーク」」

バラバラバラバラバラッ！！

青弾幕が高速で放たれる。

「うわわわわわ危なっ!!」

健人が交わし損ね、肩に被弾してしまう。

ガガガガガガッ!!

「ぐああああああ!!」

「大丈夫か、健人!!」

外傷は見当たらないが袖口から血が滴っている。軽い火傷も負ったようだ。

「ぐっ…うつっ…。」

そうつめき声を上げると、健人は気絶した。

「…クソッ、俺にもっと力があれば!!」

栄信は今だ放たれ続けられている弾幕を交わしながら考える。
そして、1つの結論に辿り着いた。

「……コイツを試すしかない！例え暴走しようとも、やってやる！！
……狂気「バーサクパワー」！！」

そのスペルカードを宣言した瞬間、
スペルの発動者は闇に包まれた。

その直後。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

黒い陽炎が立ち上る中、1人の少年が目醒めた。
漆黒と濃黒のオーラを纏って。

「（何があつたのかは分かりませんが、今がチャンス！）幻世「ザ・
ワールド」」

時が停止した。

その隙に咲夜が無数のナイフを栄信の周りに設置し、時が動き出し
たら直進するよう予約する。

時が再生され、栄信の体が剣山のようになる筈だった。

ガガガガガガキイン！！！！

時が再生された瞬間、全ての情報を0.01秒単位で把握し、回し蹴り1つだけで全てのナイフを叩き落としたのだ。
覚醒した栄信が。

「あ、あ…。」

覚醒した少年の体は

「やめて下さい…。」

既に人智を超え、超人メイドの力を遥かに上回った。

ゴッ！！ドォン！！ガラガラゴォン！！

（数分後）

「なあ栄信、この惨状はどういうことだろ羽化^{うか}。」

「知らん。俺が気付いたら辺りは半壊、咲夜^sは気絶してた。」

「取り敢えず…勝ったってことでw」

「ああ、行こうぜ。」

「「紅魔館の、主の本へ!」」

「続く」

第四話「VS十六夜咲夜」…あな恐ろしや、時の支配者（後書き）

色々あって、PAD:ゲフンゲフン

十六夜咲夜を一蹴した健人と栄信！

いよいよ紅魔館の主との闘いが始まる！！

激しい死闘の結末は！？

開花し始める2人の能力とは！？

次回、「VSレミリア・スカーレット」E:…さあ始めようか、

本気の闘いを」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第五話くVSレミリア・スカーレット I ……さあ始めようか、本気の闘いを

長らくお待ち致しました

kaiserです。

諸事情により今やっと更新出来るようになりました。

2人は現在、夜の紅魔館に居るようです。

>タグ<

「無理無理無理無理絶対無理」

「勝てる…のか？」

「死亡フラグ全開」

「→ちょwおまいらww」

第五話くVSレミリア・スカーレット I …さあ始めようか、本気の闘いを

く out sideく

咲夜を倒した2人は今、紅魔館の廊下で…

「侵入者だー！！」

チュドドドドドド！！

「軽く死ねるLvの弾幕…だと…！？」

「見つかった！！早く逃げるぞ！！」

逃げ回っていた。

「ヤバい…妖精メイド（Lv高）が滅茶苦茶集まってる。」

「つーかさ、健人は肩大丈夫なのか？まだ痛いんだろ？」

「俺のスキル「超回復」に治せない負傷など無い！」

「マジですか。」

彼等が話してる間にも、刻々と妖精メイドは増えている。

「このままじゃ埒があかない。行くぞ健人!!」

「ちょｗｗおまｗｗ血迷ったかｗｗｗｗどうやってくぐり抜けんだこの弾幕ｗｗｗｗ」

「全速前進DA!」

「社長ｗｗ」

数分後、彼等はギリギリで切り抜けた。

「火事場のなんとやら、か…。」

「死ぬかと思った…。」

「無我夢中で走ったはいいが、ここはどこだ？妙に暗いが…。」

そう、暗過ぎるのだ。小部屋ですら照明がついていたのに。
「暫くこの部屋で休もう」と、2人がそう思ったその刹那

照明が、ついた。

「ようこそ客人達、私は紅魔館の主レミリア・スカーレット。2つ名は「永遠の紅い幼き月」。」

広大な部屋の奥にある王座に、彼女は座って「居た」。
まるで最初から2人を待ち構えていたように。

「最初から貴方達が来ることは、私の能力で分かっていた。だから妖精メイドを使役して、貴方達をこの部屋まで追い詰めたのよ。」

「最初から毘だった、ということか…。」

「そう、貴方達は私の手の内で踊らされていた。そして貴方達2人は運命に打ち勝てず…」

闘いに負け、死ぬ。」

レミリアの冷酷な声が広い部屋で訝する。
だが2人はこれ位では臆さず、寧ろ闘志を掻き立てられた。

「俺達が死ぬ？それが運命？」

「笑わせるな…。」

「そんな運命、俺達がぶち壊してやるぜ…!」

そう言うと、2人はそれぞれのスペルカードを取り出した。

「何故確定した運命に抗うの？」

「決まっている。人間は運命に抗って生きてゆく生き物だからさ!」

「さあ、始めようか。」

「「本気の闘いを…!」」

「私も随分舐められたものね…。いいわ、殺りあいましょう。」

「「「Set Spell Card!…!」」」

運命を操る者との闘い。

彼らの長い夜は、始まったばかりである。

く続くく

第五話〜VSレミリア・スカーレット I ……さあ始めようか、本気の闘いを

遂に始まってしまった闘い!!

果たして2人は運命に抗うことが出来るのだろうか!?

そして若干おぜう様がキャラ崩壊しているが、作者は叩かれてしま
うのだろうか!?

次回、「第六話〜VSレミリア・スカーレット II ……運命を掛
けた死闘〜」に続く!!

(予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。)

第六話くVSレミリア・スカーレット II I ∴ 運命を掛けた死闘く（前書き）

どうもkaiserです。

創作意欲が湧いたので、1日でもう1話投稿します。

>タグ<

「いよいよ始まりました」

「運命」我に抗え。さもなくばひれ伏せ。」

「ちょww省略すんなww」

第六話くVSレミリア・スカーレット　II　…運命を掛けた死闘く

くout sideく

「俺からだ！発狂「バーサクボンバー」！！」

栄信がスペルを展開する。

「オラオラオラオラア！！」

バババツバツババババババババツ！！

不規則なリズムで爆弾を模した形の黒弾幕が飛来する。
一見交わしづらい、だが。

「甘いわ。」

レミリアは弾幕と弾幕の間を縫ってその全てを交わした。

「全弾回避…だと…！？」

「次は俺だ！風槍「デイベインテンペスト」！！」

健人の手中で空気が束ねられて形を形成し、一本の槍と化す。

「でやあっ!!」

ブオンッ!!

そしてそれを投げた。

風の槍は一直線にレミリアに向かう。しかし、

「こんな槍、交わさずとも止めれるわね。」

ガシッ

「か、風の槍を止めただと!？」

風の槍は人差し指と中指で止められ、その直後空気として霧散した。

「これが弾幕というものよ。天罰「スターオブダビデ」」

紅い光球からレーザービームが隙間が殆ど無い程射出し、更に追い討ちをかけるかの様に大量の青弾幕が放たれる。

ババババババババババ……

「危なっ！！」

「これを回避出来る霊夢達は超人だと思われ。」

「まだ終わらないのか！！疲れてきたぞ！！」

「あと少しで終わる！！3…2…1…0！」

レーザーが消え、弾幕が消えたその隙を狙って木刀を持った栄信が突進する。

「無駄。」

「何だとっ！？」

だが紙一重で、その攻撃を交わした。
その直後、レミリアの眼が紅く光った。

「数分後」

「栄信 side」

コイツは化け物か！？

…いや、化け物だったな。

兎に角何が化け物かって、俺達の攻撃を全て交わすか受け止めてその直後スペルカードを展開する。この戦術、かなりハードな筈なのにあのレミリア嬢は息切れ1つしていないんだ。

やはり…無理なのか？

ここまで着くことが出来たのは奴の策だったのか？

人間は…所詮運命には勝てないのか？

…いや、まだだ!!

俺は 運命に抗ってみせる!

例えそれで死ぬことになるうとも、最後まで抗ってみせる!!

「うおおおおおおおおおおお!!!!」

「!?!」

「栄信!?!」

今、やってみせる!!

「狂乱」まがかみばけ「凶神化」!!」

パァッ、ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

ぐおお…心が闇に支配されそうだ…。
体が熱い…だが、負けてたまるか！！

シュウシュウシュウシュウ…

レミリア side

一体何があつたというの！？
さっきまでこの人間は瀕死の状態まで追い詰められていたのに…急にスペルを唱えたと思ったら、黒いオーラを纏っていた。
それどころか体中の傷が何時の間にか癒えている。

「レミリア…俺はお前を超えた。」

心に響く程重い言葉を放ったその瞬間、彼は消えた。

「クッ、どこに！？」

「どうした？その程度か？」

いつの間にか後ろに回られていた。

「しまっーーーーー!!」

「喰らえっ!!!」

ゴォン!!

刹那、私は壁に叩きつけられた。

↳ out side

「栄信、お前に一体何が…」

「何って…凶^{まがかみばけ}神化。」

「俺以上のチートww」

「ほっとけ。それより奴さんまだまだやる気のようにだぜ。」

崩れた壁の瓦礫を粉碎して、レミリアが出て来た。

「まだ終わっていない!!」

「それはこっちも同じだ!!」

「いっくぜえええええええ!!」

紅い月の夜は、更に更けてゆく…。

く 続く く

第六話くVSレミリア・スカーレット　II　…運命を掛けた死闘く（後書き）

まがかみばけ

凶神化によって人間を超えた肉体を（一時的に）手に入れた栄信！！

ここから彼等の逆襲が始まる！！

そして健人は影が薄かったが活躍できるのだろうか！！

次回、「第七話くVSレミリア・スカーレット　III　…これが

運命に抗う者達の力だ！！」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第七話　VSレミリア・スカーレット　ⅠⅠⅠ　…これが運命に抗う者達のだ

今晚は。

最近厨二病が止まらないkaiserです。

僅かな時間を見つけて更新します。

>タグ<

「ずっとオリ主のターン!!」

「だめやん…」

「出典：DQシリーズなど」

「奇跡の勝利（テンプレチート乙w）」

第七話〈VSレミリア・スカーレット　III〉：これが運命に抗う者達の力だ

〈out side〉

レミリア・スカーレットとの闘いは、熾烈を極めていた。

「オラオラオラオラオラオラア！！」

シュバババババババババババツツ！！

まがみ
凶神と化した栄信が拳の雨を降らせる。

しかしレミリアはそれを全て交わす。

そして彼女が床に着地した瞬間、待っていたとばかりに健人がスぺルを展開した。

「今だッ！！束縛「バインド」！！」

輝く蒼い糸が出来てレミリアの両足に絡みついた後、そのまま床と同化した。

「なっ、何コレ！？外れない！？」

「フツ、それは貴重な魔金属「オリハルコン」に細工を施した物だ

「！！一度妖怪（西洋含む）に絡みつくと、絶対に外」

バシユツ！！ジユウン…

「あら、溶けたわ。」

「しまったあああああ弾幕の熱で溶けることを想定していなかったあああああ！！」

「つーか貴重な魔金属が…勿体無ねええええええええええ！！」

「フフツ、冥符「紅色の冥界」！！」

レミリアがスペルを展開した。
紅色の弾幕が様々な方向に飛んでゆく。
だが、

「健人、来るぞ！！」

「ツ！！危ねえ危ねえ。」

かすりもしなかった。

「全弾回避…！？だったら、神槍「スピア・ザ・グングニル」！！」

レミリアの手に魔力が凝縮し、緋色の槍が出来上がる。
その瞬間、健人が動いた。

「そろそろ俺も放つか…今日、この瞬間の為のスペルカードをな！
！超神槍「スピア・ザ・グングニルX」^{クロス}！！」

健人が両腕を胸元で交差させて手に気を纏う。

更にその気を棒の形に変形させることで蒼い槍が出来上がった。

「どちらの神器が強いかな勝負だ、レミリア嬢。」

「望むところよ。貴方のそのイミテーションを砕いてあげるわ。」

「言っ た な ！ ！ 」

ヴォンツ！！

「喰らいなさい！！」

グオツ！！

緋い神の槍と蒼い神の槍が、それぞれの手から放たれる。

全く違う思いを乗せた2つの槍は互いが互いを貫こうと光の速さで飛んでいき、衝突した。

ガガガガガガガガガガガッ！！

「力は互角…。」

「フツ、互角なら俺達の勝ちだ。」

「！？」

「運命なんて、多種多様に変わる未来の中の1つにしか過ぎないからさ。…そしてこの槍には「何かに抗う気持ちが頂点に達した時に未来を変える力」が込められている。」

蒼い槍が紅い槍を砕き、貫いた。

ドシ…

ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

「きゃあああああああああああ！！！！」

ドサッ

大爆発の後、レミリアが倒れ伏した。

「あばよ、レミリア嬢。」

「俺達の勝ちだ。」

そこで、彼らの意識は途絶えることとなる。

く続くく

第七話〜VSレミリア・スカーレット　ⅠⅠⅠ　…これが運命に抗う者達のか

激闘の末勝利を手にした2人！！

しかし、その闘いの音を聞きつけた悪魔の妹が現れる！！

満身創痍の彼らは、果たして紅魔館から生きて帰れるのだろうか！？

ついでに言うなら「クロス」の頭文字は「X」じゃなくて「C」だが、指摘されないで済むのだろうか！？

次回、「第八話〜エマージェンシー！妹様現る！！　…ナンテコッタイ〜」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。）

第八話 エマー・ジェンシー！妹様現る！！
： ナンテコツタイ（前書き）

くあらずじっぽいものく

前回、死闘の末にレミリアを倒した2人！
しかし2人は現在、気絶状態であった！

> タグ <

「少年氣絶中」

「フ
ラ
グ」

「推奨BGM：バイオハザード「脱出」」

第八話〜エマージェンシー！妹様現る！！…ナンテコッタイ〜

〜out side〜

2人は現在、紅魔館の医務室に居た。

「アイタタタタ…体中が痛い。」

「気がついたか、健人。」

「栄信か。ここは一体どこだ？」

「見た限り…紅魔館の医務室ってところだな。」

「ああ、どうやらそのようだ。（キリッ）」

「絶対お前分かってなかっただろww」

「サーセンww」

2人がそんな会話をしていた、その時。

ゴゴオオン…

ズズズズズズズズゴオオオオン！！！！

けたたましい音が鳴り響いた。

「何だ!？」

「何かは分らないが…嫌な予感がする。」

レミリア side

「パチエはなるべくフランを食い止めて!

咲夜はあの2人にここから逃げるよう促して!」

「分かっているわ!」

「承知しました。」

あの2人…せめて私達が時間を稼いでいる間に逃げてくれればいいけれど…。

一方その頃…

健人 side

「…というわけで、お逃げ下さい。」

「おk、把握した。」

話をまとめると、フランが暴れ出したらしく、現在お嬢やパチュリーが交戦しているが何時までも持つか分からないらしい。

ナンテコッタイ>(^o^)<

「咲夜さんは？」

「私はお嬢様をお助けするのでここに残ります。」

「そうか……じゃあ、な。」

「ええ。」

医務室を出た後、全力疾走で逃げる。

この先の人生一生立てなくてもいいから、今だけは全力で走った。

「急ぐぞ栄信！！」

「ああ、分かってる……！！！！」

ズドオオオオオオオオオン！！！！

一瞬の出来事だった。

「彼女」が、壁を突き破ってやって来たのだ。

「逃がさない。」

「どうやら…レミリア嬢は倒されてしまったようだな。」

「ああ、最悪の事態だ。」

各々のスペルカードを取り出す。

これは…ガラじゃないけど死ぬ覚悟で闘う必要があるな。

「私と…弾幕ごっこして遊ぼうよ。」

「いいぜ。…俺は手加減しないがな!!」

「ちょｗｗｗｗ卑怯ｗｗｗｗ」

「本気で闘わなきゃ殺られるってｗｗ」

「フフフ…壊れないでね？」

「「「Set Spell Card!」」」

本当の悪夢がここから始まるなんて、
この時俺は思ってもいなかったんだ。

く 続く く

第八話〜エマーゼンシー！妹様現る！！ … ナンテコッタイ〜（後書き）

というわけで妹様と（殆ど強制的に）闘うことになってしまった2人！！

死亡フラグ全開だが、生存フラグに変換できるのだろうか！？

次回、「第九話〜VSフランドール・スカーレット I 狂気と凶気と〜」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。）

第九話　VSフランドール・スカーレット　Ⅰ　狂気と凶気と（前書き）

エラーが起こって書き直し…泣きたくなってきました…。

>タグ<

「勝てる…のか!？」

「パワーチャージ（笑）」

「えーしん!えーしん!」

第九話　VSフランドール・スカーレット　Ⅰ　狂気と凶気と

Outside

フランがスペルカードを展開した。

「いくよっ、禁忌「クランベリートラップ」!」

シュバシュバシュバシュバシュバ…

2人を挟むように弾幕の壁が形成され、両側から迫る。

「栄信！俺は「最後の手段」の為に力を溜める！！その間、時間を稼いでくれ！！」

「分かった！叫弾「バーサククライ」！！」

栄信を中心にして波紋状に並んだ弾幕が連続で放たれる。

 $\dots T_1^{\#}T_2^{\#}T_3^{\#}T_4^{\#}T_5^{\#}T_6^{\#}$

互いに衝突し、相殺した。

「フッフ、ここからよ！禁忌「レーヴァテイン」！！」

焰の剣が作られ、横薙に振るわれる。
斬撃から生まれた弾が一直線に進む。

ヴォンツ！！バババババ...

「今だっ！！超禁忌「レーヴァテインD」^{ダーク}！！」

ヴァアアアアアアアア...ヴォウツ！！！！

黒い火柱が立ち、その中から漆黒の焰の剣が現れる。

「え...黒いレーヴァテイン...！？」

「そう、このスペルは貴女のレーヴァテインに対抗すべく作られた
！！その威力...とくと味わって貰おう！！」

栄信が焰の剣を掴み...

ブォウンツ！！

縦薙に振り下ろすと、

ズバァアアアアアアアッ！！！！
パキィィィィィィン！！

巨大な斬撃がフ란の持っていた焰の剣を「周囲の空間」ごとへし折った。

「！！」

「予想以上の火力…だと…！？」

「最初に「超」が付くりメイクスperlってww俺のパ栗^{くり}ww」

「パクッてる分お前も人のこと言えないだろww」

「サーセンww」

「お兄さん達は強いんだね！でもこれはどうかな？禁忌「フォーオ
ブアカインド」」

シュパパパパッ！！

フ란が4人に分身した。

「チートww」

4人に分身。個々の能力も4分の1だ！」

パーツ、ゴオオオオオオオオオオ！！！！

シュツ

「どこに居る!？」

「！！！！」

「もう遅い！！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ
つ！！！」

81

人間の肉眼では捉えることが出来ない程のスピードでフランの分身に拳を叩き込む。

「グギャアアアアアアアア！！！」

ドローンッ！！

分身の内の3人を消したところで、丁度凶神化^{まがかみばけ}の効果が切れた。

「どうだ！スペルの効果切れの前に全ての分身を消してやったぜ！
」

「だったらこれはどう？禁忌「カゴメカゴメ」」

シュバツシュバツシュバツシュバツシュバツシュバツ…

弾幕が組み合わさった壁が出来、2人を中に閉じ込める。
…しかも彼等は崩れた壁弾幕が交差する地点に居た。

「アリの穴程の隙間も無い。オワタ¥（＾o＾）／」

ドツカアアアアン！！

けたたましい爆発音と共に、煙が上がった。

く続くく

第九話〱VSフランドール・スカーレット I 狂気と凶気と〱（後書き）

禁忌「カゴメカゴメ」で被弾してしまったと思われる2人！！

彼等はどうなってしまうのだろうか！？

また、どちらが勝利を握るのだろうか！？

次回、「第十話〱VSフランドール・スカーレット II ……激闘
の勝利はどちらの手に！？」に続く！！

（予定している副題と内容は予定なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。）

第十話　VSフランドール・スカーレット

II

…激闘の勝利は誰の手に！…

くあらずじく

カゴメカゴメに囲まれた

>タグ<

「勝利への軌跡」

「レクイエム・ザ・オリハルコン」

「最終　鬼畜」

第十話　VS フランドール・スカーレット

II

… 激闘の勝利は誰の手に！…

（out side）

ドガアアアアアアアン！！

大音響と共に煙が上がる。

「自分は勝った。」 フランドールがそう思った、その瞬間。

「まだまだ終わっちゃいないぜ。」

「！！」

煙がもうもうと上がり、未だパチパチと燃え続ける「その場所」から声がしたのである。

「え…？え…！？」

「油断大敵って諺を知っているか？」

ゴゴゴゴ…

3人が闘っていた通路が揺れる。

…そして、

ズシャアン!!

「意味は…俺も知らない!!」

「じゃあ駄目じゃん!!」

何事も無かったような冗談と共に、2人が炎の中の瓦礫から飛び出して来た。

「嘘!?何で…!?!」

「分からないようだから説明しよう!!」

く回想く

「俺達オワタ¥(^o^)/」

ドドドドドドドドドドド!!

「何か良い脱出法無いか!?!」

「割り振られている魔力が均等だから、弾幕同士をぶつければ良い
じゃ内科?^{ないか}」

「だけど…どうやって。」

「こうだ！束縛「バインド」」

シュルルル…

オリハルコンで出来た糸を作り出す。

「でもそれは…弾幕の熱で溶けるんじゃない？（第七話参照）」

「大丈夫だ、問題ない。極限まで冷やしたからな。」

「そんなに良いのかよ！！」

「イインダヨ！！グリ（ry そおい！」

蒼銀に輝く糸が、カゴメカゴメの弾幕に絡みつく。
糸が円周を描く。

ボン、ボンボボンボンボンボン！！

次々と半径1m以内の弾幕が消えてゆく
…が、

ボゴオオオン！！

「やべっ、一際大きい奴に当てちまった！！」

「馬っ鹿野郎おおおおおお！！」

ぶつかり合った弾幕が光りだす。

キュイイイイイイイイン…

「栄信、早く残った糸で作った盾の中に！！」

「分かってる！！」

「じゃあな…俺のオリハルコン魔金属。」

ドカアアアアアアアン！！

「「アッー！！」」

（回想終了）

「…という訳だ!!」

「死ぬかとオモタ。」

「あの弾幕が避けれるなら…秘弾「そして誰もいなくなるか?」」

ドドド!! シャツシャツシャツ…

弾幕の壁が四方八方から2人へ迫る。

「クランベリートラップより密度が高いな…。」

「健人、まだなのか!?!」

「さっきバインドに力を使ってしまったから少し時間かかるな。それまで回避に専念してくれ。」

「把握した。」

迫り来る弾幕の僅かな隙間をくぐり抜ける。

「やっぱりお兄さん達は凄いね。フランはもう、本気出すことにしたよ。」
「Set Last Spell」

ゴォッ!!

ラストスペルの宣言がされた。
今までの比にならない弾幕が来るだろう。

「気を引き締めろ！健人！！」

「お前もな！！」

そして…遂にその符が唱えられる。

「Q E D 「495年の波紋」」

シュバババババババババババツツ！！！！

凄まじいスピードで弾幕が迫り来る。

「…補充完了だ。」

「おkおk、上出来だ。そのまま唱えろ。」

「言われずとも。最終鬼畜道化魔術「ランランルー」」

ガ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

紅魔館は 消え去った
!!
▼

画して、彼等2人が勝利を納めたのであった。

く続くく

第十話、VSフレンドール・スカーレット II …… 激闘の勝利は誰の手に！…

何だかんだで勝利した2人！！

しかし双方の全身全霊をかけた激闘の為に紅魔館が崩壊してしまっ
た！！

そんな紅魔館の主、レミリアの頼みとは！？

次回、「第十一話、紅魔館崩壊 …… 大丈夫じゃない、問題だ」に
続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。）

第十一話　紅魔館崩壊　…大丈夫じゃない、問題だ（前書き）

くあらずじらしい文章

決死の一撃↓紅魔館あぼーん

>タグ<

「The・説教タイム!!」

「おお、こわいこわい」

「新章突入…だと…!？」

第十一話　紅魔館崩壊　…　大丈夫じゃない、問題だ

栄信　side

紅魔館が健人のランランルーで消し飛んでから、実に40分が経過していた。

「どうしてくれるのよ！私の館がボロボロなんだけど！？」

「それは…その…あの…妹様を…」

「だからって限度ってモノがあるでしょ！！」

「……………」

「ちょっと、聴いてる！？」

レミリアによる説教が繰り広げられていた。

「まあまあレミィ。この2人はフランを止めてくれたんだからそれ位で」

と、パチュリーが救いの手を差し伸べてくれるが…

「パチエは黙ってて！」

「ハイ…。」

と、一蹴されてしまった。

駄目だあの喘息魔女カリスマが足りなさ過ぎる。

〽その数刻後〽

「大体興味本位とスペルカードのテスト目的だけで私の館に乗り込んで来るといつ時点で貴方達は…、」

…な、長い！

映姫様並みに長い！！

ここまで来るともうキャラ崩>>禁則事項に触れました。自動消去されます。くくなんじゃないだろうか。

つーか良く健人は耐えられるよな、と横を見ると…

「Zzzz…」

寝てるー！！

しかもレミリアは気付いてないしー！！

シュンッ

…と思っていたら、咲夜さん登場。

「お嬢様。」

「何よ、咲夜。」

「お取り込み中申し訳ありませんが、そろそろ日の出の時刻です。一旦皆様方と博麗神社へ避難した方がよろしいかと。」

「…っ！今日はここまでのようね。でも次は…フッフ。」

シュンッ

そう言い残して、レミリア含む紅魔館勢が全員消えた。おそらく咲夜さんが「時を止める程度の能力」を使ったのだろう。

…最後の微笑みは絶対不吉な何かを企んでいる笑みだ。
おお、こわいこわい。

（数分後）

「取り敢えず…動詞^{どうし}ようか。」

「動詞でww先ずは紅魔館を直すべきだと。」

「材料（と言っても倒壊した紅魔館の瓦礫だが…）はあるけど、何分力が足りないぜ。」

俺達2人じゃまず無理だし。」

「だったら…力がある皆さんの助けを借りに「あの場所」へ行くってのはどうだ？」

「あの場所？それってもしかして…。」

「そのもしかしてだ。」

「…そう、地霊殿だよ。」

く続くく

第十一話　紅魔館崩壊　：　大丈夫じゃない、問題だ（後書き）

新章突入…の前に、

作者が本当に今更ながら設定を公開!!

次回、「キャラクター設定&裏話・1」に続く!!

キャラ設定&裏話・1（前書き）

今回は設定話です。

一部ネタバレが含まれますのでネタバレが嫌いな方は飛ばして読んで下さい。

キャラ設定&裏話・1

（キャラ設定）

・江藤健人
えとう けんと

種族：人間

能力：不明

2つ名：現時点では無し

〇〇県市立羽是得中の中学2年生。身長は160cm程。
青い眼鏡、校則違反スレスレまで伸びた髪と、黒い「K」の文字が描かれた白い長袖の服が特徴。
ネタを大事にするのが心情で、変人扱いされることもしばしば。
謎のスキル「超回復」（能力ではない）持ち。
どんなに深い傷を負っても数分で全快する。因みに心の傷は回復しない。

現時点での使用スペルカード：

水槍「デイベインハイドロ」

空気中の水分を収束させて槍を作り、相手に投げつける。

風槍「デイベインテンペスト」

風を収束させて槍を作り、相手に投げつける。

雷槍「デイベインボルテクス」

空気中の静電気を収束させて槍を作り、相手に投げつける。

炎槍「デイベインバーン」

太陽光を収束させて槍を作り、相手に投げつける。

束縛「バインド」

魔金属「オリハルコン」を手元に呼び出し糸を作る。

糸が製造者以外の何かに絡みつくと食い込んで絶対に千切れないが、金属だけに熱に弱く、弾幕の熱で溶けてしまう。

光の速さで「作っている」為、手元にいきなり現れたように錯覚する。

超神槍「スピア・ザ・グングニルX」クロス

対、神槍「スピア・ザ・グングニル」専用スペル。

両腕を胸元で交差させて手に気を纏い、棒状に変形させて出来た蒼い槍を相手に投げつける。

最終鬼畜道化師魔術「ランランルー」

教祖、 دونالد・マクDonaldを呼び出し「ランランルー」を共にすることでDonaldの魔力と使用者の霊力が混ざり合い、大爆発を起こす。

ないとう えいしん
・内藤栄信

種族：人間

能力：不明

2つ名：現時点では無し

〇〇 県市立羽^{つぜえ}是得中2年で、健人の同級生。

身長は165cm程。

パーマのかかった黒髪、浅黒い肌、黒い半袖のTシャツに右手のリストバンドが特徴。

ノリが良くて適度に空気が読め、幻想入りする前はクラスの人気者だったとか。

健人とは「にわか東方2人組」の仲。

実は純粋な東方ファンに限りなく近いにわかファン。

現時点での使用スペルカード：

覚醒「バーサーカーソウル」

能力の影響で使用者の体が黒く染まってゆくと同時に背後から黒い竜巻と共に紫色の影が現れ、おびただしい数の黒弾幕をばらまく。

狂気「バーサクパワー」

使用者を中心に黒い火柱が立ち、漆黒と濃黒のオーラを纏う。

このオーラを纏っている間理性と記憶を無くして超人的な身体能力を手に入れる。

その為使用者は発動していた間の記憶が無い。

発狂「バーサクボンバー」

爆弾を模した形をした黒弾幕を不規則なリズムで飛ばす。

狂乱「凶^{まが}神化^{かみばけ}」

黒いオーラを纏い、一時的に超人的な身体能力を手に入れる。

精神は正常な状態で、強化が施されており、狂気「バーサクパワー」

の上位交換である。

叫弾「バーサククライ」

使用者を中心にして波紋状に並んだ弾幕を連続で放つ。

超禁忌「レーヴァテインD」^{ダーク}

対、禁忌「レーヴァテイン」専用スペル。

黒い火柱が立ち、その中から漆黒の焰の剣を作る。

その威力は、1振りで空間を歪ませる程。

くここから裏話く

序章よりく

・中学校の名称が「うぜえ厨」。

第一話よりく

・結局お賽銭は払わなかった。

・黒いビニール袋を被った状態で夜道を歩いていたので毛玉達には見付からなかった。

第二話よりく

・栄信は暴走していた為スぺル展開時の記憶がない。

第三話より

・この時視界不良の為実は遭難しかけていた。

第四話より

・美鈴はマジで寝ていた。

・無駄な戦闘を避ける為図書館は通っていない（パチュリー、子悪魔はこの時点では2人を知らない）。

・咲夜さんが2人に敬語を使っているのはお嬢様が運命を予知して事前に咲夜さんに伝えた（＝客人扱い）から。

第八話より

・度重なる2人と紅魔館勢の激しい戦闘音を聞いたことによりフランドールが暴走した。

第十一話より

・紅魔館勢は全員博麗神社へ避難した理由は気軽かつ近いから。

・紅魔館修復の際、鬼達の力を借りようと思っている。（だから勇

儀に許可を貰いに地霊殿へ行った。
)

〕設定話として続く

キャラ設定&裏話・1（後書き）

キャラ設定も終わり、新章突入！！

次回、「第十二話」そうだ、地底へ行こう。」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承下さい。）

第十二話　そうだ、地底へ行こう。（前書き）

よくわかる荒筋^{あらすじ}

レミリアの説教の後、紅魔館を修復するのに人手（力量）が足りないと判断した2人。地底へ行き、鬼達の力を借りることにしたのであった。

>タグ<

「いざ行こう、地底へ」

「逃走中」

「霊力〃MP」

第十二話　　そうだ、地底へ行こう。」

（out side）

2人は現在、妖怪の山で全力疾走していた。

「…疲れた。」

「何を言っているんだ健人。まだまだ道のりは長いぞ。」

「んなこと言われたって、一睡もしてないから疲れが溜まってるし…あれ？今寝たら俺死ぬんじゃないかね？」

「どうみても間違いなくポックリ逝きます。ありがとうございます。」

「ゑww」

「そんなことより…」

「ああ、どうしようか。」

2人が自分達が走って来た道を振り返る。
そこには、

「待てい人間共！！侵入者は許さんぞ！！」

獲物を持った白狼天狗が飛翔していた。

「「どうしてこうなった。」」

〈回想 数刻前〉

「ここが妖怪の山か…。」

「風景なんか見てないで早く行こつぜ。モタモタしてたら…。」

ガサッ

「ここはお前達人間の来る所ではない！！排除する！！」

「逃走フラグk t k r！！」

「逃げろおおおおおおおおお！！！！」

「「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」」

〈回想終了〉

「走れ！！走るんだ栄信！！」

「撃退法とかないか！？」

「もう既にMP切れです。何の能力が知らんけど。」

「な、なんだってー！？」

そんな会話をしてる間にも、白狼天狗が加速しつつ追いかけて来る。

「まああてええやああああ！！！！」

「まさか…加速してる！？」

「こんな奴からどう逃げろっていうんだ！！」

「！！……あの茂みに飛び込め！！」

2人は目の前にある茂みへ飛び込んだ。

ガサツガサガサツ

「くそどこへ行つたあの人間共…。」

「ゼエゼエハアハア…どうやら行ったようだな。」

「コヒューコヒュー…ああ。」

「お前呼吸音可笑しいぞww」

「そんなことよりあれを見たまえ。」

「（スルーだど！？）…あの洞穴つてもしや。」

「そのもしやだ。間違いなく旧都への入り口だが…どうするよ。」

「ここに居てもいずれは見つかる。早く行こうぜ。」

「ああ。」

2人は 地底へ 突入した！！▼

～続く～

第十二話　　そうだ、地底へ行こう。　　（後書き）

という訳で地底へ突入した2人！！

しかし、旧都へ向かう2人に怪しい影が襲い来る！！

次回、「第十三話　VS黒谷ヤマメ　…手荒い歓迎の巻」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。ご了承ください。）

第十三話　VS黒谷ヤマメ　…手荒い歓迎の巻（前書き）

長らくお待ちしました。
それではどうぞ。

>タグ<

「スパイダーマッ」

「まあ…1面ボスですから。」

「内容が微妙なのは何時ものことですよ。」

第十三話　＼VS黒谷ヤマメ　…手荒い歓迎の巻

＼out side

彼等が洞窟に潜り込んでから数分後…

「薄暗いなーここ…」

「灯りすらないからな、地上から差し込む太陽光だけで進むってのはツライ…」

2人が明るさに関しての愚痴を言っていたその時だった。

「だったら、私が明るくしてやろうか？」

「「！？」」

不意に、声がした。

返答する者が居るとするなら、ここには1人しか居ない筈だと分かっている2人は、身構えた。

暗黒の中、8つの光りと共に土蜘蛛「黒谷　ヤマメ（くるだに　やまめ）」が現れた。

「地上から人間が来るのはあの異変以来だからね。歓迎するよ。」

「それは有り難い。ところで貴女の名は黒谷 ヤマメで合ってるよな。」

「私の名を知っているとは嬉しいね。つい襲いたくなっちゃうよ。」

ゾツツ!!

2人は殺気を感じ、瞬時に悟った。

「この妖怪は、自分達を捕食する気だ」と。

「とは言っても私も鬼じゃないからね。弾幕ごっこで私に勝ったらここを通してあげるよ。」

「みすみす喰われて堪るか!!行くぞ栄信!!」

「おう!!」

「「Set Spell Card!!」」

健人が先手を取った。

「早速だが炎槍「デイベインバーン」!!」

「そうか!虫には炎!!焼き倒す寸法だな!!」

スペルカードが唱えられる。
しかし。

シーン…

炎の槍は現れなかった。

「あ…デイベインバーンは太陽光の槍だから暗い洞窟では意味が無いんだっ…た。」

「1スペル無駄にした…だと…!？」

「やれやれ、ここは洞窟の中だよ？ 罨符「キャプチャーウェブ」。」

シュシュシュシュッ!!

何本もの糸が放射状に伸び、

「危ないっ!!」

「うわわわわっ!!」

「まだ終わってないよ…」「戻れ」。

シュルルルルルッ！！バラバラッ！！

一斉に糸が縮み、弾幕がばらまかれる。

糸を避ける為に体制を崩した栄信に弾が襲いかかる。

「しまった！このままだと…！！」

「そうはさせないっ！束縛「バインド」！！」

シュバッ！！

蒼銀の糸が弾幕に絡みつぎ、

「なっ！？」

「これはそっちに返すぜ。」

ブオツ！！

「それ」をヤマメへ投げ返した。

予期せぬ事だったのだろう。避ける間も無く…

「ッ！？しまった…ああッ！！」

ドオオンッ！

被弾した。

「なんか…あっけなかったな。」

「ああ。」

その時、黒煙からヤマメが現れた。

「生きてましたか。」

「勝手に殺すな！！…でも約束は約束だからね。通してあげるよ。」

「それはどうも。」

「ありがたやありがたや。」

「…ところで俺今回も何もしてなくね？」

「栄信…ドンマソww」

「デジャヴ
W
W
」

）
続
く
）

第十三話〱VS黒谷ヤマメ ……手荒い歓迎の巻〱（後書き）

なんだかんだでヤマメを倒した2人！！

2人は旧都の奥深くへと潜ってゆく！！

そこで巻き起こる事態とは！？

次回、「第十四話〱目指せ地霊殿 ……開けるな危険！！」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第十四話 目指せ地霊殿 … 開けるな危険！！（前書き）

合唱コンなどでただでさえ遅い更新ペースが更に遅くなっています。
すみません。

>タグ<

「2人の現在地：旧都」

「パルスィ？誰それ？」

「だが開ける」

第十四話　目指せ地霊殿　…開けるな危険！！

（out side）

「誰も居ないな…」

「なんか…ゴーストタウンみたいだな。実際そうなんだけど。」

「あ、橋ってあれじゃね？」

2人は古びた橋に駆け寄って行った。

「渡る者の途絶えた橋…か。」

「結構傷んでるな…。」

そう言って、健人がトントンと橋を踏み鳴らしたその時

ポコオオッ！！

「あ。」

「！？」

橋の一部、踏み鳴らした部分が崩れ落ち、巨大な穴が開いたのである。

しかも反射的にそこから離れていなければ、普通に落ちてしまうところだった。

「橋の強度を確かめる為に踏み鳴らしたらご覧の有り様だよ！」

「まさに青メガネ危機一髪。なるべく静かに渡ろうか。」

「お、把握した。」

2人は地霊殿まで瞬速かつ無音で走り抜けた。

「地底にあるとは思えない程広いな。」

「やっと本物の地霊殿に来れたな。（序章参照）」

「あの時はスマンかったww」

「飯^{いい}よ。」

「いいのかよww」

「さて、一刻も早く紅魔館を修復する為にさとり^{さとり}に許可を…あれ？
健人？」

「なあ磯野この扉開けてみようぜ！」

健人が５メートル以上はある巨大な扉のノブに手をかけていた。

「磯野じゃない、内藤だｗｗつーか話を聴けｗｗｗ（あれ…この扉…。）」

「うぎぎ…固い。」

「…っ！やめろ健人！！多分その扉は…」

「だが開ける。」

ギギギギギ…ガゴオオオオン！！

地響きに近い音をたてて巨大な扉が開く、そしてその先には…

「うわああああ熱っ！！！！」

「旧灼熱地獄跡…アッー！！！！」

魂まで燃え尽きそうな勢いで燃え盛る地獄の焰が、ドアを開けた瞬間熱風として彼等に襲いかかり…

…一瞬で2人を飲み込んだ。

く続くく

第十四話　目指せ地霊殿　…開けるな危険！！（後書き）

地獄の焰に呑み込まれてしまった2人！！

しかし、窮地に立たされた2人に謎の助けが入る！！

次回、「第十五話　懐かしき再開　…焰からの生還」に続く！！

（予定している副題の内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第十五話　懐かしき再開　… 焔からの生還　（前書き）

定期テスト…だと…！？

ただでさえ遅い更新ペースが更に遅くなりますがご了承下さい。

>タグ<

「ポ。モンの技だなんて言わせない」

「神隠しって大抵幻想入り（ry）」

「過去の話？また後で」

第十五話　懐かしき再開　… 焔からの生還

out side

2人は焔に取り囲まれていた。

「凄まじい熱風だ。」

「脱出出来ると思うか？」

「霊力チャージ中だからむりぽ。栄信は？」

「俺もさ。」

「… 好奇心で開けた結果がこれだよ！！」

悠長に会話をしている間にも、焔は更に激しく燃え盛り2人に襲いかかる。

ドゴオオオオオオオオオオオオ！！

「「うわあああああああああくあwせdriftgyふじ
じp…！！」」

絶対絶命の2人に、助けが入った。

「…竜爪「ドラゴンクロー」」

シュアアンツ！！

ゴゴウツ…

2人を炭へと変える筈だった焔は、突如唱えられたスペルカードによって消し飛んだ。

「危なかったな。」

「ああ、助かった。礼を言う…よ…？」

礼を言おうとするが、瞬時に言葉が詰まった。

日本人らしからぬ長い金髪と片方黒でもう片方が緑色の眼。

5年前と大分成長してはいるものの、健人はその人物が誰かを思い出した。

「お前…竜樹じゃないか！？」

「…そう言うお前は健人！5年振りじゃないか！！」

「なあ健人、コイツ誰？」

「分からないか栄信。報道されたし近所でも大規模な搜索が行われ

たから知っている筈だ。今から5年前に蒸発してしまった同級生だよ。」

「……ああ！話だけなら聞いたことがある。2分前まで密室状態だった自室に居たのに、何時の間にか消えていたって…。」

「そう、紹介しておくが俺の名前は東^{あずま} 竜樹^{たつき}だ。ていうか健人…と。」

「内藤栄信だ。栄信と呼んでくれ。」

「健人と栄信はどうしてここに居るんだ？」

「ああ、それは…。」

「少年説明中」

「…という訳なんだよ。」

「成程な。勇儀姉さんの対面が目的だったら方向が真逆だぞ。」

「「え、っ！！」」

「ついて来い、案内する。」

「分かった。」

「数分後」

「というか竜樹はどうやって生きてきたんだ？」

「ああ、幻想入りした場所がここ地霊殿だな。勇儀姉さんをはじめとした鬼達に世話になったんだ。」

「だけど俺達を案内するってことは恩を仇で返すようなことじゃ…。」

「

「大丈夫。お前達が勝てば納得してくれるさ。」

「そう上手くいくか？」

「ここまで来れたんだしきっと上手くいくだろう。ほら、着いたぞ。」

「

目の前に巨大な扉が聳えている。

「俺はここでお前等を待つてるよ…グッドラック。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴオオン…

意を決して、2人は扉を開けたのであった。

「続く」

第十五話　懐かしき再開　… 焰からの生還　（後書き）

という訳で再開を果たした2人と1人！！
彼等の頼みは承諾して貰えるのだろうか！？

次回、「第十六話」VS星熊勇儀　… 結局闘えれば何でもいいのね
」に続く！！

（予定している副題と内容は予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

第十六話〱VS星熊勇儀 ……結局闘えれば何でもいいのね〱（前書き）

〱あらすじ〱

- ・白狼天狗に追われて（偶然）地霊殿へ
- ・好奇心で旧灼熱地獄への扉を開いてピンチに
- ・謎の人物に助けられたと思ったら蒸発した同級生だった

>タグ<

「定期テスト2日前なのに更新↓作者オワタ」

「単純だけど難しいルール」

「まさに鬼畜…いや、そもそも鬼だったか」

第十六話　VS 星熊勇儀 … 結局聞えれば何でもいいのね

（out side）

ギギギギギ…

2人が扉を開けたその先には…

「アンタ達2人が例の2人組だね。待っていたよ。」

赤い盃を持った一本角の鬼、ほしくま ゆうぎ星熊勇儀が居た。

「何故俺達のことを？」

「そんなことはどうでも良い。アンタ達は鬼の力を借りて紅魔館を直したいんだろ？」

「（スルーされた！！）」

「ああ、そうだ。」

「じゃあこうしよう。弾幕ごっこでこの盃の中の酒を一滴でもこぼした時点でアンタ達の勝ち、仲間に紅魔館修復の手伝いをさせよう。」

「その勝負…乗った!!」

「（俺空気だな…by健人）」

「ノリが良いじゃないか!じゃあ早速…」

「Set Spell Card!!」

闘いが始まった。

「まずは小手調べ。鬼符「怪力乱神」!!」

シャシャシャ…ブワッ!!

紫色の弾幕が次々と螺旋状にばらまかれ、小粒の赤弾幕へと化けて飛来して来る。

隙間は殆ど無いが、2人は僅かな隙間を縫って交わしていく。

「中ボススペルの時点でもう鬼畜…だと…!?」

「良く考える健人、そもそも鬼だ。」

「あ。」

一定時間が経過し、一時攻撃が止まる。

次のスペル発動までその隙を狙って、健人がスペルを発動する。

「今だ、雷槍「デイベインボルテクス」！！」

空気中の電気が収束され、出来上がった槍を投擲した。
あと数秒で届くその時、勇儀が次のスペルを展開した。

「怪輪「地獄の苦輪」。」

巨大な輪が次々と放たれてゆく。
しかもそれだけでは終わらない。

「健人、あの輪つかは…！！」

「しまった！！」

時既に遅し。

雷槍は一直線に飛び、輪に衝突した。
すると…

バチィッ！バチバチバチィッ！！

ブブブブブブブワアッ！！

輪が大玉に分離し、周囲に飛び交う。

更にはじけた電流が直撃して放たれた全ての輪が大玉になってしまったのである。

「判定を増やしてしまった…頼んだ栄信。」

「頼まれた。狂弾「バーサククライ」！！」

栄信がスペルを発動する。

ガガガガガガガガッ！！

波紋状に並んだ弾幕が飛び、大玉とぶつかって互いを相殺した。

「なかなかやるね。」

「まあ妹様を負かした実力は伊達じゃありませんから。（キリッ）」

「だったら…これは交わせるかい！？力業「大江山嵐」！！」

右から軌道が左斜め下の弾が大量に飛来してくる。

1つ1つを的確に避けながら、その僅かな隙間を目掛けて2人はスベルを展開した。

「超神槍「スピア・ザ・グングニルX」^{クロス}！！」

「超禁忌「レーヴァテインD」^{ダイク}！！」

健人の手に蒼い神槍が、栄信の手に黒い焰剣が形勢される。
2人はタイミングを読み、それを投擲した。

ヒュオオオオオオオオオオオオッ！！！！

空間を切り裂きながら2つの神器が光速で飛んで行く。

「凄いスペルを持っているんだな。でも避けれるよ。」

勇儀はその2つの神器を完璧に避けた…筈だったが、光の速さで飛ぶ神器の衝撃波によって、盃の中の酒が煽られて酒滴が宙に舞ってしまった。

宙に舞った物は大抵、引力に負けて地に落ちる。

慌てて盃を差し出して受け止めようとするが、もう遅かった。

ピチヨ…………ン

酒滴がこぼれ落ちると共に、勝敗は決した。

「俺達の勝ちだな。」

「約束は約束だ。鬼達を地上へ派遣しよう。」

「「YATTA!!」」

「だけどその前に…おい、みんなー！宴会だー！！」

「「「「ヒヤッホー！！」」」」

勇儀がそう叫んだ瞬間、どこからともなく鬼達が歓喜の声を上げて現れた。

鬼は生来宴会好きだからちょっとしたことで宴会をするのだが、この時宴会の準備をする鬼達の姿を見た2人に、ある疑問が湧いて来た。

「…俺等未成年だよね？」

「続く」

第十六話〱VS星熊勇儀 ……結局闘えれば何でもいいのね〱（後書き）

紅魔館の修復をかけた勝負に勝つことが出来た2人！！
約束を果たすその前に、宴会が行われることになる！！

次回、「第十七話〱宴会 ……地底での宴会もなかなか乙なもので〱」
に続く！！

（予定している副題と内容は、変更する場合があります。ご了承下さい。）

第十七話　宴会　…地底での宴会もなかなか乙なもので（前書き）

ハイ、今日定期テストが終わったばかりのkaiserです。
取り敢えずこの後また暫く更新できそうにありませんので、今投稿
しようと思います。

>タグ<

「作者は某ボクサーのように燃え尽きた」

「宴会開始から数時間のよーです」

「未成年の飲酒はダメ！絶対！！」

第十七話　宴会　…地底での宴会もなかなか乙なもので

out side

宴会が始まってから、既に数時間が経過していた。

健人 side

今俺は、ちゃぶ台と思わしき物体の破片があちこちに転がり、床の上には所狭しと酒瓶（空き）が並び、栄信や竜樹やさとりやパルスィ、その他全員が気絶している状況の中にいる。
まず一言言わせて貰おう。
…どうしてこうなった。

…あ、段々思い出してきた。

あれは、数分程前の出来事…。

俺と栄信は、泥酔状態の勇儀に絡まれていたんだ…。

out side

回想　数分前

「いや、ホント2人は強いな。ヒック。」

「勇儀さん…貴女、酔ってるね。」

「酔ってない酔ってない、大丈夫ら。」

「絶対酔ってるっての!!」

「私が負かされるなんて、思ってなかったよ。ヒック。」

「人の話を聴けえい!!」

「お二方は勇儀の姐御に勝ったのか。」

「おわっ、デカツ!!」

5メートル近くある鬼が登場。

「おっと驚かせてしまったか、済まない。」

「いや、大丈夫です。」

「佐助…一回こいつ等と闘ってみなよ。本当に強いから。」

「ほう…だったら俺と手合わせしてもらえないか？」

「ハハハ……。 (間違いなく俺達が負けるっての!!) 」

「いいでしょう。」

「内藤君!？」

「そうかそうか、それは有り難い、では…」

「「勝負!!」(些か気が進まない…by健人)」「」

「うおおおおおお!!」

「うわらばっ!!?」

「健人!!」

ボゴオオン!!

健人は佐助に思いつ切り殴られて壁に激突、意識を失ってしまった。

「おいヤバいぞ!!」

「誰か気付けに酒持って来い!アルコール度数が高い奴!!」

「持って来たぞ!!」

グビッグビッグビッ…

「…う、うん…」

「お、目を覚ました!!」

「良かった良かった。」

そう安緒したのも束の間…。

「ちょっと待て…様子が可笑しいぞ…?」

プルプル、プルプル…。

「フハハハハハハッ!! 槍でも弾幕でも何でも来い!!」

健人は できあがって しまった !! ▼

極端に高いアルコール度数の酒を飲むことで、一瞬で酔ってしまったのである。

酔って暴走した状態の健人は、敵無しだった。

ドゴオオン!! ドドゴオオオン!!

「ウワアア無差別攻撃だアア!!…うぎゃっ!!」

「逃げて皆…ぐはあっ!!」

「この主として、貴方を止めなければなりません…ぎゃふん!!」

「その強さが妬まし…あべしっ!!」

様々な者達が健人を止めようとしたが、全員ことごとく倒され、遂には栄信1人になってしまった。

「落ち着け…こんな時は素数を数えて落ち着くんのだ…。…1…3…5…7…あるえ？」

そうしている間に、既に健人は栄信の目の前に迫っていた。

「うわあああああひでぶっ!!」

栄信は倒れる直前に見た。

健人の気付け用に飲ました酒瓶に、

「アルコール度数：95%」と記されているのを。

「あれ…？何だか眠く…。」

栄信が倒れると共に、超回復の反動からか健人も倒れた。

＼健人 side＼

やっと全部思い出せた。

俺のせいじゃん。

…まあ、いいや。眠いし。

皆気絶してるし、もう少しばかり寝させてもらつよ。

「Z Z Z…。」

皆が起きたのは、それから実に14時間後だったとか。

～続く～

第十七話　宴会　…地底での宴会もなかなか乙なもので（後書き）

というわけで宴会も終わり2人は地上へ戻ることになる！

そして再開した以上、竜樹は2人と冒険することになりそうだが！？

次回、「第十八話」back to the 地上…竜樹の決心
」に続く！！

（予定している副題と内容は、予告なしに変更する場合があります。
ご了承ください。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805t/>

東方双俄録 ～ 2人のにわか東方ファンが幻想入り

2011年11月17日17時36分発行